



Data

監督・脚本：チョン・ジウ

出演：チェ・ミンシク / パク・シネ
/ リュ・ジュンヨル / イ・ハ
ニ / イ・スギョン / パク・ヘ
ジュン

👁️👁️ みどころ

大金持ちの事業家・テサンがワガママ娘ミラの反対を押し切って、若い美女ユナと婚約。そんな幸せの絶頂期にユナが殺され、ミラがその犯人として逮捕されたから、さあテサンは？

『沈黙、愛』という静かな邦題からストーリーの軸が読めそうだが、韓国の法廷モノは意外性が強く、ドンデン返しの連続に。テサンが選任した新米女弁護士は意外に高く、証人尋問の最中に証人から「殺したのは俺だ！」の証言を引き出したのはお手柄。ところが、その後、二転三転していく物語とは・・・？

キーワードはUSBの映像だが、それはホンモノの録画？それとも・・・？日本ともハリウッドとも異質な韓国特有の法廷モノのドンデン返しは、あなた自身の目でしっかりと。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■父親に若い恋人が！その時一人娘の反応は？■□■

チェ・ミンシクは韓国を代表する俳優の1人だが、『オールド・ボーイ』（03年）で観た小さな金鎚1本を持って大勢の敵と渡り合い、これを次々と打ち負かしていくアクションはとてつもなくすごいものだった（『シネマ6』52頁）。あの時の彼は体重を10kg落とすし、ボクシングジムに通ってその技を習得したそうだが、それから十数年経った今のチェ・ミンシクは？また、彼がイ・ビョンホンと共演した『悪魔を見た』（10年）（『シネマ26』185頁）でも、彼は悪魔としか言いようがない連続殺人鬼の役を見事に演じており、そのモンスター性は園子温監督の『冷たい熱帯魚』（10年）で観た村田幸雄以上だった（『シネマ

26』172頁)。

本作冒頭、すごい美人歌手のユナ(イ・ハニ)と2人きりの恋に酔いしれている初老の男イム・テサンが登場する。ええ、これがあの『オールド・ボーイ』で観たチェ・ミンシク?思わずそう疑ってしまうほど老けて太ってしまっているが、これはまぎれもなく今のチェ・ミンシクだ。テサンは巨大ゲーム会社の代表も務め、さまざまなビジネスへの投資も行う事業家らしく、豪華なヨットに乗って婚約者のユナと2人の世界を楽しみ、豪華な腕時計をプレゼントしていたが、そんな(女狂いの?)父親の姿を、一人娘のミラ(イ・スギョン)はどう見ていたの?テサンの妻(=ミラの母親)がどうなったのかはわからないが、いくら金と権力(地位)を手に入れても、いい歳をして美人歌手のユナに入れあげている父親を、ワガママ娘のミラが快く思っていなかったのは仕方ない。しかし、テサンを巡るそんな一種の緊張関係の中、ある日ユナが無惨に殺され、娘のミラがその容疑者として逮捕されたから、さあ大変。テサンは直ちにミラの面会に赴き、「本当のことを話してくれ!」と強く迫ったが、これが父親としての愛情のこもった態度ではなく、いつものような命令口調だったから、あくまで父親に反発している娘のミラは・・・?

状況証拠を見る限り、ミラが車でユナを轢き、その後さらに暴行を加えたことは間違いないさそう。ミラはその時、酒に酔っていて何も覚えていないと弁解したが、コトは殺人事件。そんな甘っちょろい弁解が通用するとは思えないが・・・。

■□■カネに任せて強力な弁護団を! そう思ったが意外にも? ■□■

ワガママ娘からは何かにつけて反発され、婚約者ユナとの結婚も強い反対を受けていたが、テサンが殺人事件の被告人として起訴されたミラの無罪のために法廷で闘うのなら、費用はいくらかかっても強力な弁護団を! そう考えるのが父親として当然だが、なぜかテサンが依頼した弁護士は、かわいい顔をしているが、貧乏くさい事務所を事務員と2人でやっている新米(?)の女性弁護士、チェ・ヘジュン(パク・シネ)だったから、アレレ・・・。これは、ひょっとして被害者が愛するユナだったため、弁護士費用をケチったの? いやいや、そんなバカなことはありえない。テサンのこの弁護士選任には何らかの理由があったはずだ。

シネマ40ではインド発の本格法廷モノ『裁き』(14年)を紹介した(『シネマ40』246頁)。また、去る7月24日には中東の国レバノン発の本格的法廷モノ『判決、ふたつの希望』(17年)を鑑賞したが、本作は『弁護人』(13年)(『シネマ39』75頁)、『依頼人』(11年)(『シネマ29』184頁)に次ぐ、韓国発の本格的法廷モノだ。『判決、ふたつの希望』では、一方のレバノン市民には老獪な大手事務所の弁護士が、他方のパレスチナ難民には女性の若手人権派弁護士が就いたが、実はこの2人は父娘だったというオチがついていた。それと同じように本作では、ミラを起訴した検事のトン・ソンシク(パク・ヘジュン)と、テサンからミラの弁護人を任されたヘジュン弁護士は、実は先輩後輩の関係である上、か

つては恋人関係だったそうだからビックリ。狭い法曹界ではまれにそんなことがあってもおかしくないが、ひょっとしてテサンはそんな内実をリサーチした上で、あえてヘジュンを弁護人に選任したの・・・？

テサンの巨大な会議室での打ち合わせ(?)に臨んだヘジュンは緊張気味だが、「ミラの無罪を確信しています」と述べ、全力を尽くす覚悟を宣言。しかし、なぜヘジュンはミラの無罪を確信しているの？ 弁護士が依頼者のために全力を尽くすのは当然の義務だが、それはカネに任せて無理難題を押し付けてくる依頼者の要求に何でも従うこととイコールではない。そのことを、この新米の女弁護士はよくわかっているのだろうか？ 「ミラの無罪を確信しています」と十分な根拠もないまま宣言しているヘジュンの姿を見ていると、私は少し不安になってきたが・・・。

■□■現場の監視カメラの映像は？■□■

中国では、個人崇拜を含む習近平国家主席への権力集中と共に、ITとAI技術の進歩による“監視カメラ”の増強が進んでいる。いたるところで国民が監視カメラで監視されるのはあまり気持ちのいいものではないが、悪いことばかりではなく、犯罪捜査の面ではすこぶる便利。交通事故現場の再現は容易だし、先日は劇場に設置していた監視カメラによってそのコンサートに来ていた某事件の容疑者を逮捕するお手柄も。日本でも韓国でも、プライバシーとの関係で監視カメラはそこまで普及していないが、それでもユナが車に轢かれ暴行を受けたとされる地下の駐車場には当然監視カメラがあったはず。それを再生すれば犯罪状況の再現と、犯人の特定は容易なのでは・・・？ 本作は、その監視カメラの映像を見たという男キム・ドンミョン(リュ・ジュンヨル)の証言と、その映像を録画したUSBの所在を巡って、あっと驚く法廷“内外”の展開になっていくので、それに注目！

『依頼人』も『弁護人』も法廷シーンはしっかりしたものだったが、それは本作も同じ。ちなみに、本作では証人尋問の際に証人が宣誓する姿が何度も登場するが、韓国流の宣誓は「偽証したら罪を受けると誓います」という趣旨の文言が入っており、日本流の宣誓とは違うので、それにも注目！ それとはもかく、法廷ものの華は証人尋問だが、本作中盤のハイライトは、ユナの熱狂的ファンだという男、ドンミョンへの尋問。そこでは、新米弁護士とは思えないほどヘジュンの尋問能力が冴えわたることになるので、それに注目！ 反対尋問では多少なりとも証人を挑発したり、混乱させたりすることによって、証人が隠している事実を引き出すというテクニックが許されるが、ヘジュンがスクリーン上でみせるドンミョンへの尋問技術はまさにそれ。ヘジュンからの矢継ぎ早の追及に焦り、気が動転したドンミョンは、ついに怒りに狂いながら、「そうだ！ ユナを殺したのは俺だ！」と叫んでしまったから、これにはソンシク検事も啞然。ヘジュンは勝ち誇ったように弁護人席に戻り、傍聴席のテサンも大満足。だって、こんな形でドンミョンがユナ殺しの真犯人と自白してしまえば、ミラは無罪となって釈放されることは明らかなのだから・・・。

■□■テサンの神出鬼没性に注目！こいつは本当に嫌な奴！■□■

『オールド・ボーイ』ではチェ・ミンシク扮する主人公の格闘能力が光っていたが、本作では節目節目の重要な場所に登場してくるテサンの神出鬼没性と、口数は少ないものの、そこでのカネの亡者のようなテサンの“嫌なヤツぶり”が目立っている。そもそも、大金持ちのクセに新米弁護士のヘジュンをミラの弁護人に選任したのは何のため？これはきっと、「莫大な弁護士料を払うのだから、俺の言うとおりに忠実に動け！」というアナウンスだから、私はそもそもそんな依頼者の姿も、それを受け入れたヘジュン弁護士の姿も気に入らない。

もっとも、それは当事者の選択の問題だから、どうなろうと私の知ったことではないが、昼食をとっているソンシク検事の前に座り、「カネの力で将来の検事総長の地位を約束してやるから、ミラの裁判を取り下げろ」と要求するのは何とも非常識だ。カネ、カネ、カネ、カネさえあれば何でもできると思っているのか！ソンシク検事が猛反発したのは当然だが、それに対するテサンの答えは「そうだ！」と「カネがすべて」の論理を肯定するものだったから、アレレ……。さらにテサンは、ある場面では「人間はみんな同じ価値だと思うか？」と問題提起し、その結論として「金持ちの自分と他の一般人とは違うのだ」という“自説”を堂々と展開していたから、それを聞いていてもアレレ……。こんな男を父親に持った年頃の娘が反発するのは当然だ。もっとも、私の目にはソンシク検事の方もかなり問題ありだ。それは、ある場面であつて恋人同士にあつたヘジュン弁護士に対して「この事件は降りろ！」と迫ったこと。その理由は、「有罪が決まっているのだから、そんな事件を担当すればお前が傷つくことになる」というもので、一見ヘジュン思いの理屈のようだが、韓国ではこんな公私混同が当然のようにまかり通っているの……？

それはともかく、本作ではテサンの神出鬼没性は顕著で、ある日はヘジュン弁護士にメモを渡し、どうしても仕事のためにタイに行かなければならないと大切な法廷傍聴をサボってしまったが、それは一体なぜ……？

■□■テサンの証人尋問は？アツと驚く展開に注目！■□■

ドンミョンが証人尋問の席でユナ殺しを“自白”したことに続いて、本作後半のもう1つのハイライトはテサンの証人尋問風景だが、その前には“法廷外”でテサンがドンミョンの持っている例のUSBを力ずくで奪い取るシークエンスが登場するので、それに注目！これを見れば、テサンがドンミョンの持っているUSBをヤミからヤミに葬り去ろうとしていることがミエミエだが、ヘジュンは弁護士としていくら何でもテサンのそんな暴力的かつ身勝手な行動を許せるはずがない。

そこで、役に立った(?)のが、かつてヘジュンがソンシク検事と恋人関係にあつたこと。そこで、ヘジュン弁護士はテサンを証人席に座らせたままソンシク検事と“ある密談”

を交わすと、今度は2人して裁判長と何やらこそこそと“相談”。その結果、ソンシク検事は、「テサン証人の身体検査のための令状を裁判所に申請しているので、令状が到着するまでの間、テサンの尋問を待って欲しい」と要請し、それが認められたからビックリ！こりゃ一体ナニ！なぜ、こんなやりとりが許されるの？それについて、もちろんテサンはサッパリわからないし、弁護士の私ですらこんな手続がなぜできるのかサッパリわからない。しかし、本作にみるこの一連の展開は「法廷モノ」としてはかなり興味深い。そして、裁判所から出された捜索令状によってテサンの身体検査がなされ、テサンの背広のポケットから例のUSBが取り上げられると、ソンシク検事は法廷でその上映を要請。

そこには、ユナが車に轢かれた上殴り殺された駐車場におけるドンミョンの証言通りの映像が映っているはずだったが、さて・・・？

■□■最後の更なるドンデン返しは？さあ、本作の評価は？■□■

韓国の犯罪モノ、スリラーものは、犯人の残忍性や犯人を追う刑事の執念がトコトン強いのが特徴だが、それと同じように、本作にみる韓国の「法廷モノ」はあっと驚く展開やドンデン返しが多く、それが本作の“売り”になっている。本作では、まずドンミョンの証人尋問の席での“自白”にビックリなら、続くテサンの証人尋問の席での（令状に基づく）“身体検査”とUSBの提出、その上映にもビックリだ。ところが、本作では、最後に更なるドンデン返し待ち受けているから、それに注目！

USBに録画されていた犯罪状況の内容はあなた自身の目でしっかり確認してもらいたが、その画像を見れば、ユナ殺しの犯人はミラではなく、何とテサン（の指示）によるもの！テサンは、なぜこんなことを・・・？そこですべての観客が思い出すのが、大切な公判の傍聴をサボってまで、テサンがタイに出張したことだ。テサンはタイに行って一体ナニをしていたの？本作ラスト（？）では、まるで大仕掛けの手の種明かしのように、タイでのテサンのカネに任せた大層な行動が再現されていくので、それをじっくり確認したい。その結果、あれほど“大金持ち”の“勝ち組”であることを人一倍誇っていたテサンが一転して刑務所に入ることになったのは、一時期のホリエモンこと堀江貴文の姿の再現のようだが、そこでテサンが再びヘジュン弁護士を自分の弁護人に指名するから、それにも注目！すると、本作はこれがラストではなく、更なる展開があるの？そして、更なるドンデン返しもあるの・・・？さあ、それもあなた自身の目でしっかりと！

ちなみに、「キネマ旬報8月下旬号」の「REVIEW 日本映画&外国映画」での本作についての3氏の評価は2点、2点、3点と低い。そこでは、例えば、「婚約者は殺されるためだけ、娘も疑われるためだけにいるようだし、昨今ありがちな結末ドッキリ主義がここでも頭をもたげ、世界を小さく閉じてしまう。」とか、「当然、裁判のやりとりがカギとなるが、あまり論理的展開ではない。トリックには穴があるし、弁護士がさほど頭を巡らさずとも、向こうから真相のヒントが飛びこんできたりと、終始、受け身なのが物足りな

い。」と書かれている。しかし私は、多少“やりすぎ”の感があるものの、それも含めて本作は韓国の本格的法廷モノの1つとして星4つを与えたい。

2018（平成30）年8月7日記